

一五、この世を去って——気が付かぬ人々

(ページ『執着の果て』参照)

人の揚げ足を取ったり、噂するのは面白いですよ。しかし、それをやっご覧なさい、他で自分が同じ事をやられていますよ。

自分がいて相手がいる。両方で出来ている訳ですから、自分だけじゃないですね。言われるから厭なのではなくて、そういう事をする、自分の心の中が曇ってくる。何にもならないですね。

曇りっぱなしで、そのままこの世を終わっご覧なさい、暗い処へ行っご覧なすよ。それこそ、暗いジメジメした岩の陰で一人にいるのもいる。

そんな事を言ったら、みんな「嘘だよ」と言うかもしれない。本当にそうしている人もいるんですよ。そういう処へ、たまに行く事があるんですが、

「あなた、そこで何をやってるの？」

「いやあ……分からないんです」

「ここに何年位いるの？」

「さあ……」

そういう人の心の中を観ていったら、もう何十年もいるんですね、何十年もですよ。

これは以前、高橋信次先生と初めて九州に来た時に、佐賀で講演をされたんですね。講演が終わり、質疑・応答の時間に、会場のご婦人が、

「亡くなった家の主人は、今何処にいるのか観て戴けないでしょうか」

と訊ねられたんですね。それで、壇上で高橋先生が私に仰った、

「朽木先生、あの方のご主人の意識を入れてください」

「先生、私は出来ませんよ、そんな事はやった事がありませんから——」

「出来ますよ、やっご覧なさいよ」

「先生、イヤですよ」

もう何百人といらっしやる前で、二人でやっごるんですよ。(笑)

「私がいるんだから、大丈夫ですよ。あのご婦人が、その事が分かったら、それでいいでしょう。やっごくださいよ」

そこまで言われたんでは、しょうがないですから、心の中を静かにしていったんですね。そして、そのご主人の意識を私に入れた訳です。

そうしたら、どうなったと思います？ ——十年前に交通事故で、バーン！とぶつかったまま……。自分の目の前が真っ赤になって、そのまま……。ただ呻き声を出しているだけ、ウーッ！……。……。

私はよく分かりますよね、私の体の中ですから——。

私の意識の方は、自分の体の横に出ている、それを観ている状態ですよ。

「あつ、これは交通事故だ！ こんなになるんだな。十年経ってもそのままなんだ」と分かったんですね。

よく大往生で、寝たまま亡くなられる方がおられますけど、周りは、「いやあ、大往生でしたね」と思いたいけれども、何時までも、同じ処に寝たままの人もいるかもしれないですね。この世から見たら分からないですからね。

まあ、私達は終わる時に、ウウ……と苦しんで死ぬよりかは、静かに死んだ方がいいですね。

それぐらい人間というものは執着というものがあるんですね。

ですから、亡くなる時まで人を恨んでご覧なさい。それこそ、何十年、何百年も人を恨み、帰れなくなってしまうですよ。

まあだ、偉い人達は、賄賂だなんかやっている訳ですよ。

「ちよっと監獄に行つて来ます」

なんてやっていますね。

当然、そういう人がこの世を終わったら、地獄界ですね。自分の事を全然振り返らないんですから——。

そこから、何千年も出て来られない人もいる。

これは人の事を言つて申し訳ないですが、彼の有名な豊臣秀吉でさえ、まだいるんですよ、暗い処に——。アスラ界（阿修羅界・争いだけの世界）にいるんですよ。金の仮面を被つて、未だにやっていますよ。暗い処では、金も光らないんですね。もう大分長くおりますよね。そんな事を言つたら怒られますけれどもね。しかし、本当にそうなんですよ。

ヒトラーなんか当然そうですね。もう真まつ暗くらな処ところですよ。真まつ暗くらで分からないです
ね。人々の恨うらみの念ねんが消えるまで、そこにいなければならぬ。

それぐらい、人を迷まわせたなら、迷まわせただけの処ところに行かなくてはならない。
幾いくらこの世で、やりたい事をやっても、結局けつぎはそうなってしまう。

すると今度は、その人が明るい処ところに帰るまで、自分の魂たまのグルーブの人ひと（残りの五
人）が、この世に出て来られなくなってしまう。これじゃあ、駄目だめですね。

まあ、そういう処ところへ行きたくないから、（心の教しよえを）やるのではなくて、人間が、
物の中に今いるということは、自分というものが、より人と共存きよぞん共栄きよえいの出来る自分
になるということなんです。そして、調和に向かつて、今、ここにいます。

一九八六年九月